HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	グローバル・シティ上海への中国朝鮮族の移動に関する研究 ： 「移動のなかに住まう」を実践する人々の場所からの考察［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	権, 艶美
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14413号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81767
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	QUAN_Yanmei_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：権　艶美

主査 准教授 土田 映子
審査委員　副査 教授　ゲーマン・ジェフリー・ジョセフ
副査 准教授　青木 麻衣子
副査 教授　玄 武岩 （メディア・コミュニケーション研究院）

学位論文題名
グローバル・シティ上海への中国朝鮮族の移動に関する研究
―「移動のなかに住まう」を実践する人々の場所からの考察―

本論文は、朝鮮半島をルーツとし、現在は中華人民共和国の少数民族の一つと認定されている、中国朝鮮族（以下朝鮮族）の移動を対象とした研究である。中国東北地方の延辺朝鮮族自治州に集中していた朝鮮族人口は、1992 年に中国と韓国の間に国交が樹立すると、韓国への出稼ぎなどの理由で国内外へ拡散していった。先行研究では、民族としての朝鮮族が存続し得るのかを関心とする「発展論」と「危機論」と分類される一群がある一方、中国国内各地へ移動したケース、韓国や日本などに移動したケースを、それぞれ国内移住、海外移住という枠で考察するのが通例となってきた。権艶美氏の研究は、こうした従来の枠組みに批判的検討を加え、朝鮮族の移住という現象を新たな枠組みから捉え直そうとする試みである。

本研究に導入された視点の一つは「グローバル・シティ」である。社会学者のサスキア・サッセンの定義では、世界経済の骨組みが作られ、トランスナショナル・ネットワークの中に位置し、資源と情報が大量に集積する都市を指す。著者は朝鮮族が多数移住した場所のうち、グローバル・シティとしての条件を備える上海に注目し、都市の特質が移住行動や移住後のコミュニティ形成に及ぼす影響を考察した。

もう一つの視点は、経済学者の伊豫谷登士翁（いよたにとしお）が提唱した「移動のなかに住まう」という概念である。従来の移民研究は多くの場合、移住をある定住地から別の定住地への移動と想定してきた。しかし、著者はそもそも朝鮮族にとっては延辺の自治州もルーツの土地ではないことから、朝鮮族を移動を続けるディアスポラ集団として捉え直す。

著者はさらに、ここに国際関係論の研究者、柄谷利恵子がシティズンシップ論の中で用いた「安全性」の概念を接続し、朝鮮族の移動がエスニック・ネットワークの中で安全性を担保した上で行われることを指摘する。ここから、朝鮮族の移動を個人の移動ではなく、エスニック・コミュニティそのものの移動とする捉え方が可能になった。

これらの視点に基づいて行われた本研究の、各章の概要は以下の通りである。

第 1 章では、上海を移動先に選んだ朝鮮族の人々へのインタビューを分析した。彼らは典型的には高学歴で、社会的地位の上昇と自己実現を移動の目的とする傾向が強いが、移動先が国内か海外かを選択の基準とせず、いわば国境を無化する認識を持つことが示された。

第 2 章では、上海のコリアンエスニック街の形成過程を分析した。韓国では韓国人と不平等な関係に置かれる朝鮮族は、上海では比較的平等な共存関係を築き、これがエスニック・コミュニティの再建に結びつくことが示された。

第 3 章では、上海朝鮮族の主要なエスニック団体の調査を通して、これらの団体と朝鮮族コミュニティの形成の関係を分析した。その結果、これらの団体はホスト社会への貢献を通し、朝鮮族の主流社会への編入を目指していることが明らかになった。

第 4 章では、華東朝鮮族週末学校の言語教育を取り上げた。現在「民族語」として採用されているのは自治州で用いられた朝鮮語ではなく、韓国語である。利便性重視の選択である一方、韓国語は新しい民族アイデンティティの養成にも使われていることを本章は示した。

審査委員会で高く評価されたのは以下の点である。

第一に、上海を単なる中国国内の大都市としてではなくグローバル・シティとして特徴づけ、また朝鮮族を「移動するディアスポラ集団」として位置づけたことで、既存の枠組みを越える新たな視点を見出せたことである。

第二に、「移動のなかに住まう」という概念はこれまで主に言説分析で用いられ、移民・移住の研究に適用されてこなかったが、朝鮮族がまさに「移動のなかに住まう」人々であることが本論文で示されたことで、この概念の学術的な有効性が裏づけられたことである。

第三には、八年間という長期にわたる綿密かつ地道なフィールドワークから、グローバル社会におけるエスニック集団の移動の意味を明らかにしようとした意欲的な研究であること、またフィールド調査で得られた結果を理論的枠組みと結びつけ、朝鮮族の移動の特質を抽出することができたことである。

一方、以下の欠点も指摘された。ナショナルな枠組みに基づく移民研究では議論されてこなかった移動のあり方を検討することが目的の一つだったが、この点は結論が出ていない。また、移民や移動、ディアスポラに関する研究には莫大な蓄積があるが、本論文で検討された先行研究は中国朝鮮族に関するものが大半である。より大きな人の移動をめぐる研究の流れに本研究を位置づける作業は行われておらず、本研究が限られた分野への貢献にとどまる問題は残る。これらは今後の課題であるが、本研究の可能性を示すものともいえる。

以上をもって、本論文は博士の学位にふさわしい水準に達しているものと審査委員会は判断する。